

| | |
|-------------|---|
| Title | 大学からのコメント,問題提起(基研固有の問題,京都大学基礎物理学研究所将来計画シンポジウム) |
| Author(s) | 長岡, 洋介 |
| Citation | 物性研究 (1987), 48(2): 159-159 |
| Issue Date | 1987-05-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/92520 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

大学からのコメント、問題提起

名大・理 長 岡 洋 介

1. 物性将来計画

はじめ、物研連物性専門委員会における物性将来計画の討議状況について報告したい。

物性専門委員会では現在、“大型計画”と“基礎研究”の二つのワーキング・グループを設けて、将来計画の検討をすすめている。“大型計画”として検討中のものは、大ハドロン計画に含まれるパルス中性子、ミューオン物性、および中性子物性(原子炉)、放射光の四つである。これらの計画はそれぞれに重要なもので、その推進には基本的に賛成である。

しかし、物性研究は大型計画だけでつくるものではない。個々の大学の個々の研究こそ物性研究の基盤であるべきであって、真に創造的な研究はそこから生れるであろう。したがって、物性将来計画は大型計画に片寄ってはならない。“基礎研究”の推進とよくバランスしなければ、研究に大きな歪みをもたらさだろう。そのような立場から、“大型計画”の検討と並行して“基礎研究”推進のための施策が検討されている。

物性の場合、基礎研究推進には中型、小型研究機器の整備が重要である。しかし、それは大きな中央研究所の設立という形で充されるべきものではなく、むしろ各地に分散した多数の地域研究センターの形態が望ましいと思われる。現在、このような考え方に立って計画の具体化がすすめられている。

2. 物性研究と基研

物性研究者にとって基研はどのような存在であってほしいか、という点について私見を述べたい。

はじめに、小さな例を一つあげる。アトム型の制度は若手の教育に大きな役割を果たしていると思う。日頃、自分の大学にいと、どうしてもそれぞれの研究室に閉じこもりがちである。それが基研に来ることによっていろいろな研究者と議論する機会が得られる。他分野の若手との接触も大事である。短い期間でもそのような機会が得られることは大変よい。たとえ具体的な成果は得られなくても、無形のプラスは大きいと思う。これは物性研究では果しえない基研の役割である。

これは若手教育の問題に限ったことではない。研究会でも、一つの分野の中で共同研究をすすめるためのものだけでなく、分野を超えた、開かれた議論の場をどんどんつくってほしい。研究が細分化していく中で、せっかちに成果を追いかけるだけでなく、分野を超えた“基礎物理学”の研究所としての役割を果たして行ってほしいと思う。